

棕の道草 46号「黄水仙」

佐々木ヒロシ

俳句との縁は、1990年代の初めの頃だったと思う。盆や正月に帰省すると、短冊にしたためられた母の句を目にするようになった。父の妹が、地元富岡市の結社の世話役をしていたので誘われたのだろう。「この句いいね」とほめると、母ははにかむように首を横に振った。

母は根っからの働き者で、私の記憶ではのんびりしているところを見たことがなかった。今思えばゆっくりできたのは、せいぜい仕舞い風呂で手足を伸ばす時くらいだったのではないだろうか。少しゆとりのできた晩年、母は俳句と共にあった。

母が亡くなって8年、姉が手作りした母の句集「黄水仙」。抽斗の奥にしまって置いていたことを思い出した。句集に納められていた220句余りの中から、印象に残っている句を紹介したい。

大霜の屋根滑りいる初雀

黄水仙向きそれぞれに風の墓

夫の腹奥まで覗き二月尽

麦を焼く煙一村隠しけり

しまい湯に四肢伸ばしけり虫時雨

爽涼や絹スカーフの雲流る

蠨螂の斧振り上げしまま枯るる

屏風岩立てて妙義の山眠る



母はたぶん天界から「恥ずかしいからやめて」と言っていると思う。おふくろ、ごめん。